

平岡 武

タイトル 「小笠原長時の涙」

四	キ	ジ
0	ー	ャ
0	ワ	ン
字	ー	ル
X	ド	
七	「	「
枚	な	短
以	み	編
内	だ	小
（	」	説
表		」
紙		
除		
く		
）		

信濃守護大名小笠原長時が塩尻峠の戦いで
武田信玄に敗れ、居城の松本・林城を追われ
佐久の村上義清のもとへ逃れたのは長時三十
七歳、天文十九年のことであつた。
小笠原家は、甲斐源氏・加賀見遠光の次男
加賀見長清が甲斐の国小笠原村に移り、小笠
原を称したのが始まり。その後、信濃の国を
本拠として全国に小笠原一族を分出した。
始祖長清以来、代々弓馬に優れた武人を輩
出し、長時は信玄との幾度かの戦いに敗れた
後の長い流浪の歳月の中で、弓馬術と礼法を
作法にまで高め、小笠原礼法を後世に残し
た。
長時は、永正十一年（一五一四）父小笠原
長棟の嫡男として信州深志郊外の林城で生ま
れた。母は「一段の美女也」とあえて家記に
残されたほどの美女。大永六年（一五二六）
十一月、十三歳で元服する。家督を継いだの
は天文十年、二十八歳の時であつた。

長く続いた同族内での争いが、父長棟の代

に解決し、長時は信濃の守護大名から戦国大名への道を歩もうとしていた。隣国の甲斐の国では小笠原氏と同じ甲斐源氏の一族である守護武田氏により国内統一がなされ、長時と同じ年に家督を相続した武田晴信（信玄）は信濃侵攻を開始する。天文十四年（一五四五）に晴信は上伊那の高遠頼継、藤沢頼親討伐を行おうと伊那郡へ出兵し、四月頼継の高遠城を陥落させる。武田勢は伊那を制圧すると、次には佐久侵攻を進め、小県郡の有力国衆である村上義清と対立する。天文十七年（一五四八）二月には小県郡上田原の戦いで義清は武田勢を撃破した。長時は武田敗退の報を聞き、即座に妻仙の父大町・仁科盛能、妹婿の藤沢頼親らと諏訪郡へ侵攻する。さらに六月にも諏訪西方衆らに迎合して諏訪下社を占領するが、武田方諏訪衆の反撃に遭い、馬回り十七騎と雑兵百人を失い、自身も二ヶ所に傷を負って逃げ帰った。若い

長時が父長棟に遅れを執るまいとする焦りに
も似た行動が招いた手痛い失敗であつた。
一方、この間にも村上義清は佐久方面で武
田勢を駆逐して行く。これに力を得た長時等
の小笠原勢力は、再び諏訪に延びようと、塩
尻峠で武田勢を迎え討つべく、諏訪湖を見降
ろす中腹に本陣を敷いた。
対する武田勢は七月十一日甲府を出陣した
が、行動は慎重で、十八日になつても甲斐太
井森に留まつて動かず、長時等を油断させる
作戦を取った。中々現れない武田勢に油断し
て、酒を飲み、鎧兜を脱いで寝入つていた小
笠原勢五千を十九日早朝急襲。不意を突かれ
て大混乱となつた小笠原勢は千名を超える死
者をだし、居城の林城に逃走した。
塩尻峠の戦いに大敗した長時は、戦力も衰
退し、以後武田勢の侵入を止めるだけの力す
ら無くなつて行く。
天文十九年（一五五〇）佐久の砥石城を攻
めた武田方は、一旦は包囲し、水も米も尽き

たと勝利を確信した所、村上方の調略により
退却。打って出た義清に千二百人が打ち取ら
れる、信玄の生涯で最大の負け戦となった。
長時は、これに乗り、武田軍による林城破
却後に抛った深志城の奪取を試みたが、頼み
の村上勢が勝手に陣払いし、小笠原軍千は敵
中に孤立した。その窮地に際し、
「自分が先陣を切る、追い抜いてはならん」
と全軍に下知、討死覚悟の一騎駆け。
馬上で名刀千代鶴を抜き払って、瞬く間に
十八騎を斬り伏せた。長時の勇姿に奮い立つ
た小笠原軍は、武田勢を追い散らし、脱出
に成功した。
その後、国衆の二木重高の居城中塔城に籠
城。晴信からの所領安堵を約しての投降の誘
いもあったが、「武田の家とは格が違う」と
キツパリ言い放ち、撥ねつけた。
旧領回復を断念。秋が深まり、頂きが薄っす
らと白くなつた西に連なる山々を何度、何度

も振返りながら村上義清を頼って、父祖の地松本平を落ちて行った。その後は越後の長尾景虎（上杉謙信）を頼ったが、天文二十三年（1554）には、子の貞慶を越後に残して飯田の実弟信定の鈴岡城に入る。しかし、鈴岡城も武田軍に攻められ落城。弘治元年（1555）同族の三好長慶を頼った。時の三好氏は、京都を制圧する勢い。その口利きで將軍足利義輝の弓法指南となり、河内の高安に領地を賜った。しかし、織田信長の進出で三好勢は消滅。長時は再び長尾景虎を頼って越後に戻り、越後で500貫を知行した。永禄九年（一五六六）には三好義継・松永久秀らが擁立した將軍足利義栄に太刀・馬を献上している。天正六年（一五七八）の謙信死後、御館の乱では、北条氏康の七男で養子の上杉景虎の使者を果たすが、甥の上杉景勝が家督を継承

するに及び、再び越後を離れた。
天正八年（一五八一）には織田信長に迎えられ、信濃の名義上の旗頭となり、信長の京都御馬揃えには公家衆の一人として参加している。
その後、会津の蘆名盛氏に客分として迎えられる。盛氏の下で長時は厚遇され、また軍師として戦略面で盛氏を支援した。
天正十一年（一五八三）二月二五日、会津で死去。享年七十であつた。
一説に、長時は蘆名四天王の一人、富田氏実の屋敷で酒宴の最中、家臣の坂西勝三郎の妻に言い寄り、激怒した坂西が拔刀、長時とその妻・娘を斬り殺したという。
この前年の天正十年（一五八二）三月に武田氏が織田氏に滅ぼされ、蘆名家には同行せず、織田家に残り、信長に仕えていた三男の小笠原貞慶が、本能寺の変以後に徳川家康に臣従して旧領深志城を奪還している。
貞慶は父長時を松本に迎える使者として、

長時を良く知る旧臣平林弥右衛門を出した。
待ちに待った松本からの使者、直ぐにも故
郷に飛んで帰れた。しかし、時は冬。
来春まで待つことにした。その矢先だった。
そんな時、果たして家臣の女房に言い寄る
であろか。脇腹の貞慶が気位の高い父長時
を嫌ったという説もあり、松本帰還をあえて
延期したことを含め、謎が多い。
長時は、その生涯を流浪した悲劇の人では
あるが、信玄と干戈を交え、謙信・三好長慶
・芦名盛氏らの元に寄寓し、信長とも交わる
という、まさに戦国時代を往来した武将。そ
の間に小笠原流礼法を大成し、後世に小笠原
礼法を残した波乱に満ちた生涯だった。
辞世に曰く、
「是程に近き栖を知らずして遠く尋ねし
事ぞ悔しき」
死に際に、長時の頬に流れた涙は、悔し涙
であつたのか、自足の涙なのか、立ち会つた
旧臣平林弥右衛門にも解らなかつた。